# 中国(台湾)における読解読書指導の構造

南本義一

## 1

当然のことながら、台湾の教育は、解放(一九四九年)前の中国、国民党支配下のそれの流れをくむ。しかも、いまもなお、解放前の状況をたぶんにとどめている。なかでも、国語教育において、その傾向はいっそう著しいようにみうけられる。

国共分離後、すでに二十五年を経過しながら、少なくとも根底において大きな変化を示していないことに、いかにも悠久な伝統をもつ中国の国がらを感じる。(このことは、一九二〇年前後、中国ではじめて近代国語教育が成立したとき、二千年に及ぶ「国学」教授の伝統を背景としてふまえていたこととかかわるであろう。)もちろんその間、まったく手なおしがなかったわけではない。たとえば、「課程標準」(学習指導要領)の改訂も幾度か行なわれている。教育界要人の、ことに米国留学は盛んであり、その収獲をふまえた、さまざまな試みを見出すことはできる。しかし、基本的に大きな変化はみられない。

ところで、わたくしの課題と関心は、台湾の国語教育が〝解放前の状況をとどめている〟ことにある。そして、やがて、解放後、さらに文化大革命後の新中国の国語教育を史的側面から確実に理解するための基礎作業として、整理しておきたいのである。

学制は、戦後の日本のばあいによく似ているが、一九二二年(民国十一年)公布の「学校系統改革令」によって成立したものをほぼそのまま踏襲している。六年制の国民小学校から三年制の国民中学までが義務教育(日本の小学校・中学校にあたる)、その上が三年制の高級中学(高等学校普通科)、コース別の高等学校、五年制の専門学校などとなっている。

国語科は、国民小学校では「国語」、国民中学以上では「国文」と呼ばれている。指導内容(あるいは目標)を、読む・書く・話す(聞く)の諸領域とすることも、日本のばあいに似ている。

四領域のうち、読むことの領域、すなわち読解読書指導が最も重視されるが、この傾向は、低学年から高学年さらに上級校へ進むにつれて、いっそう顕著になる。

かくて、台湾における国語（科）教育を解明しようとするとき、読解読書指導を探ることが、重要な鍵になると考えられるのである。

そこで、本稿では、まず、その読むことの指導、読解読書指導のだいたいの輪郭、構造を概観してみようとする。構造の概観であって、たとえば問題になる「精読」・「閲読」・「略読」など、いわば各論については、別の機会に譲ることを諒とされたい。

## 2

教科指導は、「課程標準」（学習指導要領）にのっとって行なわれている。現行「課程標準」は、国民小学校・国民中学・高級中学とも一九六八年に試案が示され、五年間の実験検討期間を経て、一九七二年十月公布施行されたものである。

これにともなって教科書も改訂されている。教科書は、国民小学校・国民中学までが国定で、高級中学以上は検定によっている。「課程標準」の規制力はかなり強いようであり、その内容から、ほぼ台湾における教科指導の内容をうかがうことができるとみてよい。国語科は、国民小学校・国民中学・高級中学を通じて重視されており、配当時間数も最も多い。

「課程標準」は、各科について、それぞれ、一、目標　二、時間配当　三、教材大綱　四、実施方法の四項目から成っている。

国民小学校六年間の国語科の週当りの配当時間はつぎのように規定されている。

| 学年＼時間（分）＼領域 | 説話（話す聞くこと） | 読書（読むこと） | 作文（書写　字くこと）（書写） | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 低学年（一、二年） | 一年一学期第十週までは注音符号の学習、その後は四領域の混合学習。 | | | 390 |
| 中学年（三、四年） | 30 | 270 | 90 | 30 | 420 |
| 高学年（五、六年） | 30 | 270 | 90 | 30 | 420 |

一年二学期制であり、教科書（国定）もこれに合わせて各学年上下二巻、合計十二巻である。同じく国民中学では、「国文」の授業は、三学年それぞれ毎週六時間（五十分授業）で、うち四時間が「範文講読」（教科書教材の講読）に、残り二時間が「書法練習」（書写・習字練習）・「語言訓練」（文法学習）・「課外閲読指導」（読書指導）にふりあてられることになっている。

また高級中学では、第一学年が毎週六時間（五〇分授業）で、うち「範文精読」（教科書教材の読解）に四時間、「範文略読」・「中国文化基本教材」（「論語」・「孟子」抄）にそれぞれ一時間があてられている。第二学年からは文科系と理科系に分かれる。理科系は週五時間で、「範文精読」に三時間、「範文略読」・「中国文化基本教材」にそれぞれ一時間があてられる。文科系は週七時間となり、このほかに「国学概要」（文学・哲学史）二時間が加わる。

読むことの領域、読解読書指導は、国民小学校・国民中学・高級中学の三課程とも、国語科のなかで、最も大きな割合を占めており、かつ中心的な役割をになっている。ことに、高級中学では、他の領域のすべてが、読解読書指導に包含されることになる。なかでも、書くことの指導、作文教育との緊密な関係は、この国の国語教

育の特色といえる。こうした傾向は、中国の文化・教育の伝統と深いかかわりをもつものと考えられるが、その点についての考察も別稿に譲りたい。

3

すでにふれたように、台湾の教科教育は、「課程標準」を中心に展開されている。

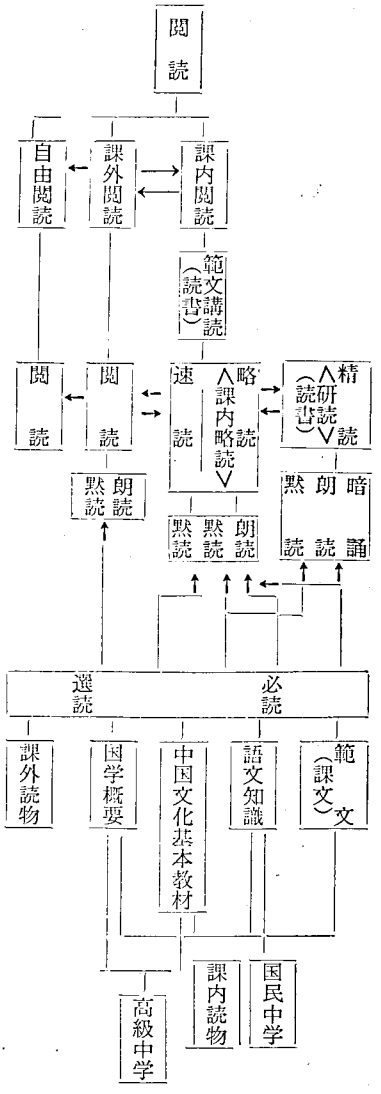
その「課程標準」を中心に、読解読書指導の構造（輪郭）を整理すると、右のように図示できよう。

まず、読むこと（読解読書行為）すべてを包含するものとして「閲読」がある。それが教科（国語科）内での学習指導としての「課内閲読」と「課外閲読」を経て、応用読書（生活の場のなかでの読書行為）としての「自由閲読」へと展開していく。

「課内」とは課本（教科書）を用いる、の意味で、課本の教材を国民中学以上では「範文講読」ともいう。なお、同じことを国民小学校では「読書」（教科書の読解）という。日本のいわゆる読解指導にあたる。

「課内閲読」指導（「範文講読」・「読書」指導）の基礎的・中心的位置を占めるのが「精読」指導（「研読」あるいは「読書」指導ともいう）である。これが「略読」指導（「課内略読」ともいう）「速読」指導へと展開される。「略読」は略して読む、の意味で、「精読」法のうち、実際に応用度の高い、目標に添って確実に要点をおさえてゆく読みを集中的・効果的に指導しようとする。「速読」は、単位時間に多くを読みとる訓練である。この間、暗誦・朗読・黙読法なども指導される。

「課内閲読」の教材は「課内読物」（教科書）で、「範文」（「課文」ともいう）のほか、国民中学では「語文知識」（文法）、高級



中学では「中国文化基本教材」（「論語」・「孟子」抄、別冊）・「国学概要」（文学・哲学史）が加わる。

なお、「範文」の教材は、つぎのように「必読」と「選読」教材とに分けるよう「課程標準」に定められている。

範文教材は、能力の程度の異なる（高低）のグループの授業に適応するように配慮して、必読教材と選読教材の二種に分ける。必読教材は、能力がやや低いグループあるいはやや高いグループの区別なく、すべて講読する。選読教材は、もっぱら能力のやや高いグループの講読に供する。能力が特に高いグループあるいは特に低いグループについては、教師が生徒の程度を斟酌し、自分で判断して、教材を増選あるいは削減することができる。その増減の量は、必読教材と選読教材総分量の十分の二を限度とする。

（傍線は引用者、「国民中学課程標準」一九七二年教育部公布、正中書局印行、四四ペ）

「必読」・「選読」教材の文体別の割合も定められていて、教科書編集の基準となっている。たとえば、国民中学第一学年については学つぎのようになっている。

1 記叙文
- 口語文六篇　必読五篇　選読一篇
- 文語文三篇　必読二篇　選読一篇

2 論説文
- 口語文三篇　必読　選読二篇
- 文語文二篇　必読一篇　選読二篇

3 抒情文
- 口語文三篇　必読二篇　選読一篇
- 文語文一篇　必読
- 口語文二篇　必読

4 応用文

（前掲「国民中学程標準」五一ペ）

「課外閲読」は、国語科として行なう読書指導で、国民小学校・国民中学・高級中学とも、正規の授業のなかに組みこまれている。その教材が「課外読物」で、国民中学・高級中学では「課程標準」中、最小限の教材を例示している。たとえば、国民中学第一学年についてはつぎのようになっている。

毎月少なくとも一冊

1 国父伝
2 蔣総統伝
3 その他短篇文芸名著
4 閲読報告の習作（前掲「国民中学課程標準」五二ペ）

国父とは孫文のことで、その三民主義は、国民精神の基盤となっている。蔣介石総統とともに、その思想・伝記に関する著作は最も広く読まれているようである。

「課内閲読」⇄「課外閲読」は、社会生活における読書行為、「自由閲読」（「閲読」）を目ざしており、そこに収束されるようになっている。

構造図は、ほぼ、以上のことを意味する。

4

すでにみたとおり、教科（国語科）としての読むことの指導は、「課内閲読」から「課外閲読」へと展開されている。その「課内閲読」の基礎的・中心的位置を占めるのが「精読」であるから、指導の

実際ということからすると、この国における読むことの指導は、「精読」と「課外閲読」としての「閲読」を両輪としているということができる。「精読」が、ほぼ、わが国の読解にあたり、「閲読」が読書にあたる。

さて、「課内閲読」（読解）・「課外閲読」と、ともに「閲読」の語を用いている。「閲読」は読解、読書を統べる概念でもある。現下のわが国で、読解指導・読書指導の関係ないしはあり方が、争点の一つになっていることにも、はなはだ示唆的であるといえる。譚達士女史（台湾省立台北師範専科学校教授）は「閲読」について、つぎのように述べている。

閲読とは、ふつう、いわゆる読書（読むこと）のことで、書物上の文字・絵画が眼球をとおして脳にはいってきて、脳に書物で文字があらわす意味を理解させることである。〈中略〉読まれるものは、ふつうの書物だけでなく、新聞・公文・書信・報告・広告等々にわたり、読まねばならぬ文件は日々ますます広範になりつつある。そこで「読書」の二字では読まねばならぬものを（すべて）包括するには不充分になってきた。「閲読」、この呼び方は、文字・符号・絵画を用いて構成される読物を（読むことを、すべて）包括できる。だから「閲読」は「読書」にくらべて包括する範囲は大で、意味もまた広くなければならない。目を使いさえすれば、すぐに読んだ材料が脳にはいってきて、脳にその意味を理解させ、その内容を知らせること、（これらは）すべて「閲読」である。もちろん、声を出して読むばあいも、出さずにみるばあいも、（よむことで）意味を理解すること、すべて「閲読」とよぶのである。（「国語能力指導」一九七〇年、台北省立台北師範専科学校付属国民小学印行、七九ペ）

「閲読」の概念の誕生が比較的新しいこと、伝統的な読むことの概念「読書」から、「閲読」へと推移したことが、簡潔にとらえられている。

「課程標準」ではどうなっているのであろうか。国民小学校・国民中学・高級中学の「課程標準」国語科編の、それぞれ第一章「目標」のなかから、関連語いを含む項目を抽出すると、つぎのようである。

（国民小学校）

① 。児童が国語教科書教材を研読し、好ましい閲読習慣を養うこと、文章作法を理解すること、およびつぎの四種の閲読能力（を育てること）で、生活上の必要に適応するよう指導する。

㈠ 迅速に閲覧し、大意を理解する。

㈡ 用心して精読し、細節を記取する。

㈢ 全文を綜覧し、大綱を把握する。

㈣ 内容を深究し、含義を推取する。（「国民小学暫行課程標準」一九六八年、正中書局印行、壱総目標六、七五～六ペ　傍線は引用者、以下同じ）

② 。児童がすぐれた課外読物を閲読し、児童文学作品を欣賞する興味と能力を養うよう指導する。（同七、七六ペ）

。児童が、一・二年用の国語教科書教材を精読し、内容の叙述、語句の応用と語句の練習に注意するよう指導する。（同弐分段目標、一低学年目標㈥、七七ペ）

。児童が、多くの課外の注音（ふりがなつき）読物を閲読し、閲読への興味と能力を培養するよう指導する。（同㈧、同ペ）

。児童が、三・四年用の国語教科書教材を精読し、課外読物を

閲読して、大意を理解し、段落を研討し、内容の細部を記取するよう指導する。（同二中学年目標㈣、七七ぺ）

。児童が、五・六年用の教科書教材を精読し、課外読物を閲読し文章内容を綜合すること、大綱を把握すること、含義を推取することを訓練することを重視することで、欣賞能力と写作技巧を培養するよう指導する。（同三高学年目標㈣、七八ぺ）

。児童が、教科書教材の内容を精読するとき、随時、基本の文型を提示して、練習応用することで、表現能力を増進するよう指導する。（同㈥、七八ぺ）

（国民中学）

③ 。生徒が口語文を研読し、本国の言語・文字の組織および応用の方法を理解し、さらに各種文体の作文技法および文法の運用を理解するよう指導する。（前掲「国民中学課程標準」第一目標参、四三ぺ）

。生徒が、明易な文語文を研読し、口語文と文語文が措辞上差異のあることを理解し、比較するよう指導する。（同肆、四三ぺ）

。生徒が、心身に有益な課外読物を閲読し、それで文学作品を欣賞する興味と能力を培養するよう指導する。（同伍、四三ぺ）

（高級中学）

④ 。生徒が、口語文を閲読し写作する能力を高める。（「高級中学課程標準」一九七一年教育部公布、正中書局印行、第一目標壱、四三ぺ）

。生徒が、平易な古典を閲読し、明易な文語文を写作する能力を養う。（同弐、四三ぺ）

。生徒が、すぐれた課外読物を閲物して、その文学作品を欣賞する興味と能力を増進するよう輔導する。（同叁、四三ぺ）

「研読」、「精読」は同義であるとみてよい。「精読」と「閲読」について、つぎのようなことがいえるであろう。

第一は、①にみられるように、教科書教材の「研読」（「精読」）指導を中心・基本にすえつつ、「閲読習慣」を身につけ、「閲読能力」をきたえるという構造になっているということである。「閲読能力」は、広義の続解読書力をさすものととれる。つまり、読解（「精読」）をきたえることにより、読書（「閲読」）生活を確立し、読書（「閲読」）能力を高めるということになるのである。

第二は、②・③にみられるように、「精読」（「研読」）の対象を「教科書教材」とし、「閲読」の対象を「課外読物」と明快にしていることである。このことはまた、「精読」・「閲読」指導の目標・内容を明確にすることにもなっている。教科書を用いては、要するに、「精読」指導をねらえばよいのだし、「課外読物」を用いては、「閲読」指導をねらえばよいということになる。

なお、「課外閲読」が、正規の授業時間のなかに組まれていることは、すでに述べたとおりであるが、成績評価の対象とすべきこともまた「課程標準」で決められている。

。課外閲読の補充読物は、課内読物の教材と相互に配合することによって、課内読物で不足するところを補なうようにせねばならないし、（課内読物）同様に、成績配慮（のばあいの対象に）せねばならない。（前掲「国民小学暫行課程標準」、第四実施方法、壱、三読書㈤、九七ぺ）

。国語の成績評価にあたっては、日常考査・平常練習・期中試験・期末試験などの様式を利用し、生徒の範文講読・作文練習・課

外閲読および書法練習など、各方面の学習進展の状況を考査する。（前掲「国民中学課程標準」、第四実施方法、捌二、五〇ぺ）。国語の総成績の計算は、範文および中国文化基本教材が百分の四五、作文練習が百分の四〇、課外閲読指導が百分の一〇、書法が百分の五と規定する。文科系の国学概要は別わくとする。（前掲「高級中学課程標準」、第四実施方法、捌二、五一ぺ）

国語科としての「閲読」（読書）指導の位置が確固としたものであることがわかる。

第三に、②・③・④とみてくると、②・③すなわち、国民小学校・国民中学では「精読」（「研読」）となっているが、④すなわち高級中学に至っては「閲読」とのみ見えて、「精読」（「研読」）の語がない。「口語文を閲読し」「平易な古典を閲読する」とは、教科書教材をさすものと考えられるから、このばあいの「閲読」とは、国民小学校・国民中学の「精読」（「研読」）の展開したものと考えられる。「精読」は、しだいに「閲読」に収束されるという関係がわかるのである。

台湾における読むこと（読解読書）の指導は、「精読」↓↑「閲読」というしくみで、これを両輪として指導されているのである。

## 5

「精読」（読解）指導と「閲読」（読書）指導を結ぶものとして「略読」指導と「速読」指導がある。

譚達士女史は「精読は準備であり、略読と速読は応用である」といい、さらに「略読」について「授業という点からいうと、精読が主体で略読は補充である。だが効果という点からいうと、精読は準備で略読は応用である」、「略読」は黙読法を多用し、要点を効率的におさえてゆく。したがって、ときにはむしろ「略読」を手がかりに、「精読」（「研読」）へはいっていくこともあるのだといっている。（前掲「国語能力指導」、八七ぺ）

また、頼明徴氏は「略読は、速く広く読む方法で、読むとき、精読のように仔細に調べることもなく、逐字理解せねばならないこともない」「陶淵明が『書を読むに甚しく解するを求めず』というのは、略読をさしているのである。略読はおおむね黙読を用いる」「（黙読は）眼球運動で、いわゆる一目十行も訓練によって可能である」「訓練する者は、眼球運動のきまりあるリズムにより、眼の停止回数を少なく、停止時間を短く、換行を正確に重複よみのないようにすれば、停止ごとに見れる字数と範囲もまた広がっていく。（このようにして閲読速度が伸びるのである。）」と述べている。（「国文教学概説」一九六九年、一鳴書店、八三～八四ぺ）

つまり、基礎段階としての「精読」を、目標としての「閲読」へ連結するために、「精読」法中、「精読」法と「閲読」法のつなぎとなる要素を、さらに取り立てて指導しようとするのが、「略読」と「速読」指導と考えてよいであろう。その意味で、「精読」↓↑「略読」・「速読」であり、「速読」は「略読」を含み、「略読」は「速読」を含むものといえる。こうしたなかに、朗読（音読）↓黙読法の段階もふまえられている。

「略読」について「課程標準」にはつぎのような項目がある。

。朗読と黙読の割合：一・二年は朗読が黙読より多くなるように、三・四年は朗読・黙読がそれぞれ半はんになるように、五・六年は黙読が朗読より多くなるようにせねばならない。朗読の授業では、発音・語調のことから、姿勢の正しさ自然さや、迅速

で（きちんと眼球を動かし、喉音をなくして閲読時間を短くするよう注意すること……などをしつけ、）要点をおさえる（すなわち段落に分けて要点を求めるというような大綱の把握をする）よう注意せねばならない。（前掲「国民小学暫行課程標準」、第四実施方法、乙、三読書㈥、九六ぺ）

。略読の図書は、欣賞的なもの、実用的なもの、参考的なものの三種をあわせ重んじねばならず、ただ、学年の高低によって、分量を加減するようにせねばならない。略読の図書は課内指導するほか、児童の課外閲読とすることを奨励せねばならない。（同㈥、九七ぺ）

。教科書教材のうち、語文知識は、略読方式によって、篇中の要点を提示し、生徒が応用練習するよう指導せねばならない。（前掲「国民中学課程標準」、第四実施方法、弐、三、四八ぺ）

。第一学年は、毎週平均六時間とし、範文精読および作文に全時数の六分の四、範文略読および中国文化基本教材にそれぞれ六分の一をあてる。（前掲「高級中学課程標準」、第二支配時間壱、四三ぺ）

。第二・第三学年は、理科系が毎週五時間とし、範文精読および作文に全時数の五分の三をあて、範文略読および中国文化基本教材にそれぞれ五分の一をあてる。文科系は、毎週七時間とし、うち五時間は理科系と同じで、あと二時間を国学概要にあてる。（同弐、同ぺ）

。範文は精読と略読の二種類に分ける。精読教材は簡練を主とし、略読教材は平易を主とする。（同第三教材大綱壱、四四ぺ）

。略読文は、欣賞の興味を培養することを主とする。講読のさい、全篇の主旨、各段の要旨、内容の精義および文章の結構を提示し、自由研究をさせ、教師は補足指導することで、自主学習能力を養う。（同弐、二二、四九ぺ）

「略読」の位置づけがうかがえるのである。

国民小学校では「略読の図書」として、教科書以外に教材を求めているが、国民中学・高級中学では、教科書教材をその性格によって「精読」と「略読」に分けている。

国民中学一年用国語教科書（国定）「国民中学校 国文第一冊」（第一学期用）の「編集大意」の第六、およびその目次はつぎのようになっている。

。所輯の範文は「精読」と「略読」の二種に分けてある。精読範文は、題目上に◎印をつけて区別する。また、朗読・暗誦・黙写に便利なように、精読範文は、短篇を多選している。閲読の興味を増加し、閲読能力を高めるため、略読範文はときに長篇を選んでいる。（一ぺ）

（目次）


一、国民中学連合開学式典の訓詞　蔣中正
二　立志大事をなす　孫　文
◎三、孔子と弟子　論　語
四、孔子と教師節　程天放
五、民国元年の双十節　王平陵
六、辛亥武昌起義の逸話　章微顔
七、荷蘭の将を守るに示すの書　鄭成功
◎八、慶祝台湾光復節　蔣中正
九、えい菊の記　朱惺公

十、大明湖　劉鶚
一一、国父の幼年時代　呉敬恆
◎一二、革命運動の開始　鄒魯
一三、慈烏の夜啼　白居易
◎一四、燕詩示劉叟　白居易
一五、わたしの父　段永瀾
◎一六、沈雲英伝　夏之蓉
◎一七、自由と放任　蔡元培
一八、ネルソンの逸話　梁啓超
一九、白馬湖の冬　夏丏尊
二〇、自発的革新　中学生雑誌

ほぼ、古文ないし擬古文が「精読」の、現代文が「略読」の教材になっている。

読解と読書をどう位置づけ、どう関連させるかということは、現下のわが国でも重要な課題となっている。両者のつなぎの指導として「略読」・「速読」指導を具体的に位置づけて、指導の目やすを示していることは、一つの着想といえよう。

6

台湾における読むことの指導、読解読書指導の構造を概観してきた。

ある国ないしある地域の国語（科）教育をみていくのに、何から手をつけるのがよいのか、やさしい問題ではない。とりあえず、その大ざっぱな輪郭を探ることから、その手がかりをつかむことを、今回は課題とした。

そのうちまず、読むことの領域をとりあげた。すでにくり返しとわったように、本稿では、その構造を概観したまでである。

浮きぼりにされてきた「精読」（「研読」）「略読」・「速読」・「閲読」等については、それぞれ、随時、詳論していくつもりである。

——49年3月17日稿——（福岡女子短期大学）